

構成性と家族の複合語

山 田 伸 明*

Compositionality and Compound Words about Family

Nobuaki YAMADA*

1. はじめに

文の意味を構造に基づき、より小さな単位から大きな単位へ合成し、最終的には、文の意味を得ようとするのが、構成性の原理に基づく意味論の態度である。この論理哲学的な意味論の原則に対して近年、言語学の分野から様々な批判が出されている。このような、批判が出される原因は、意味とは何かという最も基本的な点に見解の相違があるためであると考えられる。例えば、場面的要素など、いわゆる語用論的な要素を極力排除し、意味を分析しようとする論理実証主義的な意味論、ならびに、この影響を強く受けている、言語学の意味論では、構造に基づく構成性の原理を重視する。一方、意味を用法から捉えようとする意味論ならびに語用論を提唱する学者は、程度の差はあれ、構成性の原理に関して疑問をもつ学者が多い。最近注目されてきている認知意味論ならびに深谷・田中（1996）で提唱されているコトバの意味づけ論もこの傾向がある。小論の前半では、言語学の分野のみに焦点を当てこの点を検討する。

後半では、二つ以上の語が組み合わせられ構成される複合語に構成性の原理がどの程度適用可能かを検討する。特に、家族・家庭関係の複合語に焦点を当てる。ここでは、構成原理のみでは、説明できない複合語が多々あるという点を示す。それにもかかわらず構成性の原理は意味を理解するための一つの重要な要素であることも示したい。尚、意味素性が組み合わせられ単語の意味が形成されるというような理論に対しても語の構成性という用語が用いられることが言語学ではあるが、この分野は今回は、検討の対象外にする。

2. 1 構成性の原理とは

モンタギュー文法の解説書である、Dowty, et alは、フレーゲの原理とも呼ばれる構成性の原理を以下のように説明している。

The idea is that the syntactic generation of each sentence will be mirrored or “recapitulated” semantically, and in this way we will generate an infinite class of truth conditions while

*外国語教室 (Department of Foreign Languages)

putting them in correspondence with object-language sentences. Adherence to this strategy has in fact become one of the cornerstone of truth-conditional semantics, and it is known as Frege's Principle or the Principle of Compositionality. (Dowty, et al, 1981: 7-8)

この原理をGazdar (1987) を参考にし、簡単にまとめるなら、文の意味は、統語構造（文法構造）に基づき、語あるいは形態素というような小さな単位を組み合わせ、さらに大きな単位の意味を組み立てて行き最終的には文の意味が得られるというものである。

この考え方は、言語学では、拡大モンタギュー文法とも呼ばれる、GazdarらのGPSG、あるいは、その流れを引く言語理論に忠実にとり入れられている。また、変形生成文法の枠にそった意味論を提唱した、Katzなども構成性の原理を取り入れた意味論を提唱している。さらに、統語論の自律性を説くチョムスキーにしても、枠組みはかなり異なるが、統語構造に従った意味解釈しか認めていないので、形は異なるが、構成性の原理を忠実に守っているといえる。(1)のように、同じ単語が使われていても生起する文法的な位置が異なれば、意味が違ってくるので、この原理はある程度当を得たものであるといえる。

(1) a. Seiko hit Masahiko

b. Masahiko hit Seiko.

また、第二言語習得の場合に、文法を知らなければ、習得しようとする言語を十分身につけることができないことから、構成性の原理はある程度言語的事実を捉えたものであるといえる。

しかし、この原理に疑問を持つ言語学者も多い。ここではそれらの学者の内、概念的意味論 (Conceptual Semantics) を提唱している、ジャッケンドフ (Jackendoff) の考え方と、構成性の原理に基づく意味論を Building Block Theory であるとして批判している認知意味論の考え方を参考にし、それぞれ、複文・重文、単文、複合語のレベルに分けて検討する。尚、構成性の原理の位置を過小評価し、語用論的な意味こそが、言語学に於いて特に重要なものであるという、Verschuieren (1994) のような考え方は、今回は、検討の対象外にする。ちなみに、Verschuieren は、例えば (2) のような、移民に関して述べた文にみられるバイアスを研究するのが、私たちが目指すべき文、あるいは、発話の意味研究であるとしている。それぞれ、ベルギーにおいては、(2a) が右よりの人の意見で、(2b) がリベラル派の意見であるがそれぞれバイアスがあるとしている。

(2) a. Migrants should be sent back to their countries of origin.

b. Migrants should integrate themselves into our society. (p.557)

2. 2 複文・重文

統語構造に意味構造が一对一对応しない例として良く挙げられるのが (3a) のような、表面的には等位構造であるが、意味的には (3b) のように、条件節的な意味をもつ構文である。

(3) a. One more can of beer and I'm leaving.

b. If you have one more can of beer, I'm leaving.

(Culicover & Jackendoff, 1997: 196)

Culicover & Jackendoffは、(3a) のようなものは、統語的には従位構文であるといえないとしている。その理由の一つとして、It is raining becauseというように従属節内で従位接続詞が文の後に来ることがないことから、(3a)も、[S_{ILS} and]S₂のような、従属節的な、構造分析ができないという点を挙げている。また、従位構文の場合は、従属節が主節の前にきても、後にきてもいいのに、(3a)の場合は条件節的な意味をもつ方が必ず、先頭にこななければならない点からも、この構文が統語論のレベルでは、従位構文であるといえないとしている。さらに、この構文は、前の節でも、後の節でもWH構文による主語と助動詞を倒置した構文が、(4)のように可能であるが、従属節では、(5)のように、WH倒置構文は、非文となる。

(4) a. Who does big Louie visit and the whole gang goes nuts?

b. Big Louie sees this mess and who's going to be in trouble?

(5) a. *Who does if Big Louie visit, the whole gang goes nuts?

b. *Who if does Big Louie visit, ...?

c. *If what does he mention, ...? (ibid., p. 210)

従って、(3a) のような構文は、統語構造のレベルでは、等位構文であるが、意味構造では、従位構造になっているとする。従って、必ずしも統語構造に従って意味構造が組立てられていくわけではないとCulicover & Jackendoffはしている。同様なことが、「The+比較級, The+比較級」にもJackendoff (1997) はいえるとしている。

2. 3 単文

統語構造と意味構造が必ずしも一対一に対応するわけではない。この点を、主にJackendoff (1997) を参考に検討してみる。(6) のa~cはすべて、S+V+Oの構文であるが、(6a)では、統語的には目的語の位置にあるNPは、主題 (Theme) と変化をこうむるもの (Patient) という意味役割をもつし、(6b)では、目的語の位置にあるNPは、目標 (Goal) という意味役割をもち、(6c)では、その位置にあるNPは、起点 (Source) と変化をこうむるもの (Patient) という意味役割をもつ。従って、統語構造と意味構造 (Jackendoffは概念構造と呼んでいる) は、一対一対応しているわけではないと、Jackendoffはする。

(6) a. Emily threw the ball.

b. Joe entered the room.

c. Emma emptied the sink. (Jackendoff, 1997: 34)

さて、Jackendoffは(7)は、一つの解釈としては、通りを何回も繰り返して横断したという意味になるが、もう一つの解釈では、通りのもう一つの側に、苦勞して渡ろうとしたという、一回だけの動作と取れるとしている。これは、VPを統語構造を基にして、構成した結果生まれてくる意味ではなく、文脈・場面によって生まれてくる意味であるとしている。従って、(7)の意味の曖昧性も統語構造に基づく構成性の原理のみでは、説明できず、新たな統語構造に基づかない意味解釈が必要になる。

(7) Bill kept crossing the street. (p.51)

また, Jackendoff (1997) や Pustejovsky and Boguraev (1996) によれば, (8 a) では, 「小説を読む」とか「小説を書く」という解釈は可能だが, 「小説を飲む」という解釈が不可能である。一方, (8 b) では, 「ビールを飲む」という解釈が可能であり, 場合によっては, 「ビールを瓶につめる」という解釈も可能であるが, 「ビールを読む」などという解釈は不可能である。

(8) a. Mary began the novel.

b. Mary began the beer. (Jackendoff, 1997: 60)

これは, 統語構造に基づく構成性の原理からではなく, 目的語の位置にくる名詞に関する知識によって始めて理解できるとしている。それ故, この場合も統語構造に基づく構成性の原理のみでは説明できない。Jackendoff (1997) では, このような例が多数あることを理由にし, 統語構造に基づく, 構成性の原理だけでは, 文の意味構造を万遍なく合成できないとし, 統語構造と意味構造は, 一対一に対応するものではないとする。この点を, 彼は, 以下のように, 説明している。

General form of SS-CS correspondence rules

Syntactic Structure X

{must/may/preferably does} correspond to

conceptual structure Y. (Jackendoff, 1997: 32)

ちなみに, SSはSyntactic Structure (統語構造) を意味し, CSはConceptual Structure (概念構造・意味構造) を意味する。

(6) ~ (8) で検討してきたような例よりさらにはっきりと統語構造と意味構造が対応しないといえる例は (9) のような, 文の形で生起する成句である。これらの例は, 主に Jackendoff (1997) と Langacker (1997) からのものである。

(9) a. The jig is up. (万事休す)

b. The cat's got X's tongue. (~がだまり込んでいる)

c. That's the way the cookie crumbles. (世の中はそんなものだ)

d. The damn cat is already out of the bag. (秘密がもれた)

e. It rains cats and dogs. (土砂降りだ)

このような成句は, 例外的なものであると退けられるかもしれないが, Jackendoff (1997) は, これらの成句は数限りなくあり, また人は, 成句を次から次へと作って行くので, 単に例外であるとして退けるのは, 問題であるとしている。

その他, 背景的な知識なしには, 十分な意味解釈ができない例は数限りなくある。(10) ~ (13) は, そのような例の一部である。

(10) My car must have been made on Monday. (Taylor, 1995: 90)

(11) Joe walked right into the door. (篠原, 1997: 58)

- (12) A busy working mother had just enough time to drop off the daughter at the baby sitter's and make an important appointment.

(*Reader's Digest*, Sept., 1997, p.68)

- (13) She can't walk. (瀬戸, 1997: p.55)

(10) の、この車は、工員がまだ本気で仕事をする体調になっていない月曜日に製造されたにちがいない、という意味は構成性の原理では説明できない。(11)に関しても、述部を統語構造に基づき合成しただけでは、ジョーがドアにぶつかったという最も一般的な意味は得られない。(12) も、drop off (置く) の意味だけから「子どもを預かってもらう」という意味には、ならない。前後関係からその意味が推測できるだけである。(13) の例は、瀬戸 (1997) によれば、あるファッションモデルが仲間のファッションモデルに対して批判的に言った場合は、単に「歩くことができない」という意味ではなく「モデルとしての歩きができない」という意味になる。この意味も統語論に基づく構成性の原理のみでは、説明できない。

概念的意味論を推奨する Jackendoff は、(6) から (13) の意味を説明するには、統語論とは、ある程度、独立した意味の構成性の原理を提唱し、さらに、それでも当該の文の意味が得られない場合は場面・文脈的なものも考慮に入れて意味を理解しなければならないとしている。しかし、彼は、音韻部門、統語部門、意味部門のそれぞれの構成性は、認めている。一方、認知意味論を提唱する学者の中には、統語部門も含め構成性の原理は単なる虚構にすぎないと考えている学者もいるし、部分的にしか構成性の原理を認めない学者もいる。例えば、Langacker (1997) や、Taylor (1995) は、以下のように述べている。

Cognitive grammar unproblematically accepts at face value the observation that constituency is sometimes fluid and variable.

(Langacker, 1997: 3)

On the other hand, the absence of full compositionality,...is all-pervasive phenomenon, and recourse to polysemy is unlikely to restore it completely.

(Taylor, 1995: 226)

筆者は、構成性の原理は文の骨組みとしての意味を理解するには大切であるが、それぞれの文の意味を万遍なく理解するには、百科事典的知識、文脈などその他のあらゆる要素を考慮に入れなければならないと考える。そう考えるのは、言語の意味には、文字通りの意味以外に、色々な認知体系がかかわっているからである。

3. 複合語

本節では、複合語に構成性の原理が適応可能か否かに関して論じる。さらに、次節では、このことが、家族・家庭に関する複合語にも当てはまるかを検討する。

最初に、英語の複合語を見てみよう。redhead は、「頭髪が赤毛の人」であり、blackhead は「先端部が黒いニキビ」のことである。従って、同じような、色を表わす形容詞＋名詞というように表面的には、同じ形式の複合語でも全然意味が異なっている。また、Lehnert (1988) によれば、dog collar は「犬の首輪」であるが、flea collar は「犬・猫用のノミよけ用の首輪」である。この

場合、名詞＋名詞の形になっているが、統語的あるいは形態的な複合語の性質から構成的に意味を推測することは、できない。さらに、Taylor (1995) にあるように、topless barは「トップレスの女性がいるバー」であり、topless judgeは「トップレスの女性あるいはそういう店の経営者などを裁く判事」であり、topless districtは「トップレス・バーのある区域」である。これらの、例は、背景的な知識なしに、構成性の原理のみでは説明できない。また、old friendは、「旧友」という意味になるが、old wifeは「年老いた妻」という意味に解釈される。これも構成性の原理のみでは説明しきれない。その他、(14) のreal bachelorは「女たらし」という意味になるが、この意味も構成性の原理では説明できない。

(14) Mary's husband is a real bachelor. (Taylor, 1995: 95)

その他、fake gunやwooden turtleなど、構成性の原理では、意味を合成できない複合語が多々ある。これは、複合語は特殊な意味をあらわすために作られるためであり、作られた複合語は社会的な背景から、さらに意味が特殊化し、統語的・形態的な意味の構成原理だけでは、説明できなくなるためであろう。Jackendoff (1997) は、このような例が多々あることから、複合語は成句と同じように、統語的・形態的な構成性の原理のみでは、説明できず、意味構造独自の構成性の原理を設定しなければならない、として以下のようにのべている。

I want to show that the lexical machinery necessary for compounds is sufficient for most of the noncompositional treatment of idioms. (p. 164)

筆者は、ここで挙げたような例は、社会的背景などあらゆる知識を用いてこれらの複合語の意味を捉えなければ、解釈不可能であると考ええる。

日本語の場合も同様なことが当てはまる。例えば、辻 (1997) によれば、〈贈り物〉と〈送る＋物〉とは意味が異なる。何でも郵便などで送れば、送る物になるが、送る物であるからといって、必ずしも、贈り物とはならない。何らかの必要な書類を受け取ったからといって、それが、必ずしも贈り物であるとはいえない。同様に〈置物〉と〈置く＋物〉とは意味が異なる。ゆもと (1997) でも、〈本箱〉と〈本をいれる＋箱〉などの、意味の相違が指摘されている。例えば、引っ越しのときに本を入れる（ダンボール）箱を〈本箱〉とはいえない。また、〈赤い旗〉と共産党の機関誌である〈赤旗〉との関係にも同様なことがいえる。さらに、〈でもしか先生〉に至っては、とうてい合成的に意味解釈は不可能であるといえる。従って、ゆもと (1997) は、「意味の単位として、現実のものごとをなづけ、それと直接にかかわるのは、できあいのものとしてのあわせ単語の全体であり、あわせ単語の要素は、全体の意味にばいかいされて、間接的に、現実のものごととかかわる。あわせ単語の要素は、現実とのかかわりに関して、単語にくらべて二次的である。したがって、また、..., 単語の要素のくみあわせは単語のくみあわせとはおのずから性質のちがうものとなっている。」(p.188)としている。ちなみに、「あわせ単語」は複合語・派生語の意味である。

従って、日英語ともに、形態的・統語的な構成性の原理のみでは、複合語の意味を万遍なく理解できないといえそうである。

4. 家族・家庭の複合語

以上、統語・形態構造に基づく構成性の原理に批判的な学者の説を検討してきた。本節では、山田（1993）に挙げた家族・家庭に関連した複合語の例を中心に検討し、構成性の原理がどの程度、妥当なものであるかを論じてみたい。

（14）に挙げた例は、各要素（単語）を組合わせた意味と複合語の意味がほぼ同じといえるものである。

- （14） a. 共働き家族，片働き家族，単親家族，ひとり親家族，夫婦別姓，女性差別，
性別役割，離婚家族，母子家族，母子世帯，独居老人，家庭内暴力，
欠損家庭，女性問題
b. single mother, single parent family, multi-generation
family, housemaid, housework

これらの、複合語は前の要素と後の要素との関係は、例えば、母子からなる家族、家庭内での暴力というように、いろいろと異なるが、ほぼ確実に意味を理解することができる。尚、〈女性問題〉は、女性の社会・家庭における地位の問題に関係した文脈の新聞記事から取ってきたものであるが、男性の女性とのトラブルという意味もあるので、曖昧性がある。

次に、（15）の様な例は、構成性の原理にはのっとっているが、定着していないため背後の文脈を見ないと意味が理解しにくいものである。

- （15） a. 死後離婚，レンタル家族
b. part-time mother, part-time marriage, blended family,
biological mother

〈死後離婚〉は、死後、夫と同じ墓に入らないことであり、〈part-time mother〉は、離婚後週何回か子どもの面倒を見に来る元母親のことでは。これらの例は、それぞれ、〈離婚〉〈mother〉がメタファーとしてつかわれている。尚、〈gay mother〉や〈homosexual family〉という表現が、一見矛盾するが雑誌などに使用されることがあるのは、この場合も、後半の要素がメタファー的に使われているためである。その他の（15）に挙げた複合語の意味は、山田（1993）を参照されたし。

さて、（16）の例は、単に意味を合成しただけでは、解釈が不可能である。

- （16） a. 援助交際，代理母
b. housewife, househusband, homemaker, homework, homesick

例えば、〈house〉と〈wife〉を合成しただけでは「専業主婦」の意味は得られない。また、米語で最近よく使われる、同じく「専業主婦」を意味する〈homemaker〉も〈home〉と〈maker〉を合成しただけでは、その意味は得られない。これが女性に関連しているということは各要素の意味からは理解できない。〈homework〉にしても、単にその要素を合成しただけでは、学校で出される宿題という意味は得られない。（16）にあげた英語は比較的定着した意味を持つものばかりであり、そ

これらの複合語自体で意味が固定してい一単位をなしているの、普通はあまり意識しないが、要素ずつ分析してみると構成性の原理だけでは、説明できないことがわかる。日本語の〈代理母〉にしても、要素を合成しただけでは、おなかを貸して子どもを産む女性という解釈はできない。尚、〈援助交際〉も単に要素の意味を合成しただけでは「少女売春」という意味はでてこない。この表現は、緩叙法が関係していると考えられ、(16)の他の例とは、性質が異なるかもしれない。いずれにせよ、(16)の例は、単に要素の意味を合成しただけでは得られず、前後の意味関係を説明するには、かなり他の言語表現を利用しなければならない。また、百科事典的知識や、社会的背景にかんする知識を援用しなければ要素の前後関係は説明できない。

(17) は、前あるいは後の要素のいずれかがメタファー表現である例である。

(17) a. housemother, housefather, houseparent

b. おじん妻, 金太郎コンプレックス, コミューター・マリッジ, ホテル家族,
劇場家族, 要塞家族, サナトリウム家族, 有夫母子家庭, クレーマー家庭,
六法全書家庭

(17) の英語の例はいずれも「寮母・寮父」を意味するが、〈mother〉など後半の要素がメタファー的に使われている。実際は父母でなくても、父母役をする人である。

日本語、の例は、〈有夫母子家庭〉を除いて、いずれも前に来る要素が、メタファー表現になっている。〈有夫母子家庭〉は夫がいつも不在であるので、その状態を〈母子家庭〉にたとえている。さて、〈おじん妻〉とは、男性と同じように、いわゆるスーパー・ウーマンとして、外の仕事に張り切り、家庭のことをあまりかえりみない妻のことであるが、このような妻の生活状態を〈おじん〉にたとえている。〈ホテル家族〉にしても、お互いに家族で共通する点が、家へ寝にくるだけという家庭をホテルにたとえたものである。他の例もほぼ同じ様に説明できる。尚、その他の(17)の表現の意味は、山田(1993)を参照されたい。いずれにせよ、これらは、前後いずれかの要素が、メタファー表現であるということを理解せず、単に、前後の要素の意味を合成しただけでは、説明できない。ところで、英語では、家庭的な人、あるいは出不精な人を指して〈homebody〉というが、この場合、人を〈body〉にたとえているので、〈body〉は、広義のメトニミー表現である。

最後の例として、(18)に挙げたのは、複合語全体がメタファー表現であり、一つの単位としての意味を構成しているものである。

(18) a. couch potato

b. 濡れ落ち葉, 粗大ゴミ, 地域粗大ゴミ

〈地域粗大ゴミ〉は、定年後に図書館や公民館にかよう夫のことを指す。その他は、一般的に使用されているので説明する必要はないであろう。これらの例は構成性の原理からは、文字通りの意味しか得られない。メタファーの意味、言い換えればこれらの表現が本当に意味する転義的な意味を得るには、さらに解釈が必要である。

以上の検討から、家族・家庭の複合語には、(a)ほぼ形態的構造に基づく構成性の原理で説明できるもの、(b)形態的な構成性の原理では、十分な意味的説明が不可能で、構成性の原理に加

え、他の、意味解釈が必要なもの、(c)前後のいずれかの要素がメタファー表現であるもの、(d)複合語自体がメタファー表現であり、単に構成性の原理だけでは、文字通りの意味しか得られないものがあるという点をみてきた。このような点から、構成性の原理には、問題があるという結論になってしまうかもしれない。しかし、(a)のような、構成性の原理で説明できる例が、最も多いといえる。(b)は、構成性の原理だけでは説明不可能かもしれないが、例えば、〈housewife〉はa wife working mainly for her familyのように、背景的な事柄を知っていれば、ある程度パラフレーズが可能であり、基には、何らかの構造があると思われる。(c)のような例も、ある程度、構成的に意味をとらえることができる。例えば、〈おじん妻〉はおじんのような生活パターンを持つ妻と解釈できる。(d)に関しては、複合語自体が、メタファー表現であるため、構成性の原理は、関係しないと片付けることができるかもしれないが、文字通り意味から想像力によってメタファー的な意味を思いうかべるには、やはり、合成的に構成されている元の意味を理解する必要がある。従って、家族の複合語を分析する場合は、百科事典的あるいは社会的背景に関する知識など、いわゆる語用論的知識が必要だが、構成性の原理が、複合語の意味解釈にはかなり重要な役割を果たしているといえよう。いいかえれば、意味の枠組あるいは骨組みを形成していると言っても過言ではない。尚、今回は、前後の意味関係の類型に関しては、ほとんど分析を行わなかったが、この点に関しては、日本語の場合は斎藤・石井 (1997)、英語の場合はLehnert (1986)などが参考になる。

5. おわりに

前半では、統語構造・形態構造に基づく構成性の原理を問題視する学者の説を紹介した。ここで扱ったのは、特に、統語論に基づく構成性の原理に批判的な、Jackendoffの概念的意味論と認知意味論の議論を紹介したため、構成性の原理には問題点があるという印象を与えたかもしれない。しかし、統語論に基づく構成性の原理では、うまく説明できないという例として挙げられているのは、例外的なものが多い。文に関して、例として挙げられているのは、〈命令文あるいは名詞句+and+文〉あるいは〈The+比較級, the+比較級〉さらには成句的なものである。これらのものは、Jackendoff (1997) のそうではないという主張にもかかわらず、特殊なものであり、一般的な文は、統語構造に基づき構成的に意味解釈はできるといえるのではないか。ここで取り上げた例も、表面的は統語構造からは、意味解釈はできないかも知れないが、基にある意味は構造にのっとって解釈できる。従って、すくなくとも、基底にある意味は、構成性の原理により組み立て可能と言えよう。もちろん、各文脈における、その場にふさわしい意味を理解するには、語用論的知識が必要であろうが。

複合語に関しても同様な事が言える。後半では、家族・家庭に関係した複合語を検討した。ほんの限られた分野の複合語を分析ただけで一般化することは、危険かもしれないが、複合語もほとんどの場合、形態的構造に基づき意味解釈が可能である。意味が特殊化しているもの、あるいは、メタファー化しているものは、社会的な知識など、背景的な知識や慣用化した表現に關す

る知識が必要なことは事実だが、このような複合語でも構成的な構造が関与していることをみてきた。複合語のメタファー表現でも構成的に解釈できる文字通りの意味を知らなければ、その表現の意味は的確には捉えることは不可能である。

例えば、濡れ落ち葉の文字通りの意味をしらなければ、邪魔者扱いされている者というメタファーとしての〈濡れ落ち葉〉のイメージを捉えることはできない。従って、批判は多いが、尚、構成性の原理は意味の骨組みを理解するのに最も重要な一つの原理といえる。

参考文献

- Austin, J. L. (1962). *How to Do Things with Words*. Clarendon Press.
- Baumgartner, P. and S. Payr (eds.) (1995). *Speaking Minds*. Princeton University Press.
- Chomsky, N. (1996). *Powers and Prospects*. Pluto Press.
- Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) (1975). *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. Academic Press.
- Cruse, D. A. (1990). *Prototype Theory and Lexical Semantics*. In: Tsohatzidis (1990: 382-402).
- Culicover, P. W. & R. Jackendoff. (1997). Semantic Subordination Despite Syntactic Coordination. (1997). In *Linguistic Inquiry* Vol. 28, N0.2. pp.195-217.
- Dowty, D. R., R.E. Wall and S. Peters (1981). *Introduction to Montague Semantics*. D. Reidel Publishing Company.
- Eco, U., et al (eds.) (1988). *Meaning and Mental Representations*. Indiana University Press.
- Fairclough, N. (1995). *Critical Discourse Analysis*. Longman.
- Fillmore, C. J. (1978). On Organization of Semantic Information in the Lexicon. In: *Papers from Parasession of the Lexicon*. CLS: 148-73.
- Gazdar, G. (1979). *Pragmatics: Implicature, Presupposition, and Logical Form*. Academic Press.
- Gazdar, G. (1987). Computational Linguistics. In Lyons, et al (eds.), pp. 152-78.
- Grice, H. P. (1975). Logic and Conversation. In: Cole and Morgan (1975: 41-58).
- Jackendoff, R. (1983). *Semantics and Cognition*. The MIT Press.
- Jackendoff, R. (1997). *The Architecture of the Language Faculty*. The MIT Press.
- Johnson, M. (1987). *The Body in the Mind*. The University of Chicago Press.
- Katz, J. J. (1987). Common Sense in Semantics. In: Lepore (ed.) pp.157-233.
- Kay, P. (1997). *Words and Grammar of Context*. CSLI Publications.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous things*. The University of Chicago Press
- Lakoff, G. (1995). Embodied Minds and Meanings. In P. Baumgartner and S. Payr (eds.) pp. 115-129.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar I*. Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar II*. Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1997). Constituency, Dependency, and Conceptual Grouping. In *Cognitive Linguistics*, Vol. 8, pp.1-32.
- Lappin, S. (ed.) (1996). *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*. Blackwell.
- Lehnert, W. G. (1988). The Analysis of Nominal compounds. In: Eco, et al (eds.) pp. 155-180.
- Lepore, E. (ed.) (1987). *New Directions in Semantics*. Academic Press.
- Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*. CUP.
- Lyons, J., et al (eds.) (1987). *New Horizons in Linguistics 2*. Penguin Books.

- Pustejovsky, J. & B. Boguraev (1996). *Lexical Semantics*. Clarendon Press.
- Searle, J. P. (1969) *Speech Acts*. CUP.
- Sperber D. & D. Wilson (1995). *Relevance*, Second Edition. Blackwell.
- Taylor, J.R. (1992). Old Problems: Adjectives in Cognitive Grammar. In *Cognitive Linguistics*, 3-1, pp. 1-35.
- Taylor, J. R. (1995). *Linguistic Categorization*. Clarendon Press
- [辻幸夫訳 『認知言語学のための14章』 紀伊国屋書店 1996年]
- Tsohatzidis (1990). *Meanings & Prototypes*. Routledge.
- Ungerer, F. and H.-J. Schmid (1996). *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Longman.
- Verschueren, J. (1994). Meaning in a Theory of Pragmatics. In *BLS* 20, pp. 553-562.
- Wierzbicka, A. (1990). 'Prototypes save': on the Uses and Abuses of the Notion of 'Prototype' in Linguistics and Related Fields. In: Tsohatzidis (1990: 347-67)
- 深谷昌弘・田中茂範 『コトバのく意味づけ論』 紀伊国屋書店 1996年
- フロムキン他著・梅田巖他訳 『言語学の視界』 あぼろん社 1996年
- 菅野盾樹 「はじめにイメージがあつた」『イマージュ』 1992年 vol. 3-6 6月号 pp. 204-213
- 河上誓作 『認知言語学の基礎』 研究社出版 1996年
- 国広哲也教授還暦退官記念論文集編集委員会編 『文法と意味の間』 くろしお出版 1990年
- 大津由紀雄編 『認知心理学3 言語』 東京大学出版会 1995年
- 斎藤倫明 石井正彦 『語構成』 ひつじ書房 1997年
- 瀬戸賢一 『認知のレトリック』 海鳴社 1997年
- 篠原峻吾 「認知意味論と認知文法」 『月刊言語』 1997年 9月号 pp. 52-69
- 山田伸明 「家族の新語・複合語」『中部大学国際関係学部紀要』 NO. 10, pp. 87-97 1993年
- 山梨正明 『認知文法論』 ひつじ書房 1995年
- ゆもと しょうなん 「あわせ名詞の意味記述をめぐって」 斎藤 石井 (1997) pp. 176-191